

T M & A R G

Discussion Paper No. 78

戦間期中国における米系国際銀行
—International Banking Corporation
北京支店、天津支店、広東支店—

菅原 歩

2007年3月

TOHOKU MANAGEMENT & ACCOUNTING RESEARCH GROUP

GRADUATE SCHOOL OF ECONOMICS AND
MANAGEMENT TOHOKU UNIVERSITY
KAWAUCHI, AOBA-KU, SENDAI,
980-8576 JAPAN

Discussion Paper No.78

戦間期中国における米系国際銀行 —International Banking Corporation 北京支店、天津支店、広東支店—*

菅原 歩†

2007年3月

東北大学大学院経済学研究科
〒980-8576 仙台市青葉区川内
sugawara@econ.tohoku.ac.jp

要約

本稿ではインターナショナル・バンキング・コーポレーション（以下、IBC）の支店活動について、1923年と1930年のデータを比較することによって1920年代のIBC北京支店の活動を推定することと、中国の貿易港所在の支店である天津支店（1936年）と広東支店（1937年）のデータを北京支店のそれと比較することを主要な課題とする。戦間期の中国諸支店に関する実証分析からは、第一に、1920年代に北京支店が一貫して上海支店に資金を供給する役割を果たしていたことが示された。第二に、貿易港に所在し、上海支店と類似の構造を持つと推測される天津支店・広東支店の活動の分析から、貿易港にある支店は、資産側に多額の貿易金融項目を持っており、そこから利益を得ていることが示された。

* 本研究に当たり、西村閑也先生（法政大学）、鈴木俊夫先生（東北大学）、蕭文嫻先生（大阪経済大学）より資料収集に際してご助力を得たことに感謝を申し上げます。本稿に誤りがある場合、それは菅原によるものである。また、本稿は、平成17-20年度科学研究費補助金（基盤研究A）「グローバリゼーションと国際銀行業の展開：1900-1990」（代表者：鈴木俊夫・東北大学教授）および2005年度全国銀行学術研究振興財団研究助成「シティバンク・グループの海外ビジネス網の形成過程」による研究成果の一部である。

† 東北大学大学院経済学研究科助教授

I. はじめに

本稿の課題は、アジアにおける各国国際銀行の活動の一事例として米系国際銀行の中国における活動を検討することである。アジアにおける国際銀行の活動についての支店別バランスシートなどの詳細な内部史料を利用した研究は、日本人による横浜正金銀行の研究を別とすれば、西村閑也「香港上海銀行の行内資金循環、1913年」(『経営志林』第30巻1号、1993年4月)より始まった。西村閑也「英系国際銀行とアジア、1890-1913年(2)」(『経営志林』第40巻4号、2004年1月)の中で、1913年のアジアにおける主要な国際銀行として挙げられているのは、英系の香港上海銀行、チャータード銀行、マーカントイル銀行、ナショナル・バンク・オブ・インディア、デリー・アンド・ロンドン銀行、仏系のインドシナ銀行、露・仏系の露清銀行、独系の独亜銀行、日系の横浜正金銀行、米系のインターナショナル・バンキング・コーポレーションである。米系国際銀行インターナショナル・バンキング・コーポレーションのアジアにおける活動を示すことが本稿の目的である。

米銀の国際化についての代表的な概説は、C. W. Phelps、*The Foreign Expansion of American Banks*、1927である。またCitibank(1915年にInternational Banking Corporationを買収した)については、H. van B. Cleveland and T. Huertas、*Citibank: 1812-1970*、1985が詳細な研究書としてあり、近年Citigroup、*Citibank: A Century in Asia*、2002が出版された。しかし、いずれにおいても西村が行ったような支店活動の分析を基礎として国際銀行の活動を明らかにするような作業は行われていない。これらの他には、間宮弟彦『英國為替銀行二關スル復命書』明治40年(1907年)が、1903年、1904年ごろのIBCロンドン支店についてある程度の情報を示している。

そこで、本稿ではインターナショナル・バンキング・コーポレーション(以下、IBC)の支店活動を明らかにすることを試みる。しかし、IBCについては今のところCitibankが所蔵する史料を利用することができない。そのため、本稿では上海社会科学院が所蔵するIBC史料を利用する。しかし、上海社会科学院所蔵史料で支店活動を時系列的に検討できるのは北京支店(1923年、1930年、1932年)とボンベイ支店(1931年、1932年、1937年、1938年)だけであった。そこで本稿では、1923年と1930年のデータを比較することによって1920年代のIBC北京支店の活動を推定することと、中国の貿易港所在の支店である天津支店(1936年)と広東支店(1937年)のデータを北京支店のデータと比較することを主要な課題とする。

以下では、IIで設立から1926年までのIBCの活動の概要を、IIIで1920年代のIBC北京支店の活動を、IVでは1936年の天津支店と1937年の広東支店の活動を示す。Vで以上の分析から得られる結論を示す。

II. インターナショナル・バンキング・コーポレーション：1902－1926年

IBC は、1926年にほとんどの支店を親会社のナショナル・シティ・バンク（現シティバンクの前身）に移管するまで、米銀で最大の海外支店網を持つ、代表的な米系国際銀行であった。アメリカでは、1864年の国法銀行法の下で、主要な預金銀行である国法銀行の支店設立が禁じられていた。国法銀行はまた手形引受も禁じられていた。1880年代まで、米系銀行で国際金融を行っていたのは、ブラウンやモルガンのようなマーチャント・バンクであった。また、アメリカの貿易に関する金融の大部分を英系銀行が取り扱っていた。

預金銀行で海外支店を設立したのは、国法銀行法の制約を受けない銀行であった。米系銀行の最初の海外支店は、1887年設立のエクイタブル・トラスト・ロンドン支店である。次いでギャランティ・トラストが1897年にロンドン支店を設立した。エクイタブルもギャランティも州免許の信託銀行である¹。

IBCの設立については、Cleveland and HuertasのCitibankが以下のように述べている。「1901年に、コネチカットの産業家でレミントン・アームズ・カンパニーを発展させたMarcellus Hartleyが、法律家で実業家のThomas H. Hubbard将軍と、極東との貿易の促進に関心を持つ著名な人々と共に、コネチカット法の特別免許の下で、インターナショナル・バンキング・コーポレーションを設立した。米西戦争でのアメリカの勝利とフィリピンの併合の後、ビジネス・金融界とワシントンでは、アジアとの貿易の発展への関心が高まった。IBCはその関心のひとつの表明であった。Hubbardが新会社の会長に、Hartleyが社長に指名された。その後すぐ後者が亡くなり、Hubbardが会長に加えて社長になった。」

「HubbardはIBCの拡大の推進力だった。1902年4月に、ロンドンに最初の支店を開いた後で、彼は上海支店（1902年5月）、続いてマニラ支店とシンガポール支店（1902年7月）を設立し、極東ネットワークの構築を開始した。彼は、極東でのIBCの主要な競争相手であるイギリス海外銀行の組織を模倣し、人員を手に入れた。1914年には、IBCはニューヨークのウォール街60番の本店と、ロンドン、パナマ、サンフランシスコの支店と、大部分がイギリス人とスコットランド人を配置された中国、日本、その他の極東諸国での16の支店ネットワークを持っていた。IBCは第一次大戦前に海外支店を持っていた唯一のアメリカ人所有の銀行ではなかったが、最大で最も成功していた。」²IBCの設立については、CitigroupのCitibank: A Century in Asiaでも類似の記述がある³。また、須藤「第一次大戦前ニュ

¹ 以上の記述については、須藤功『アメリカ巨大企業体制の成立と銀行』1997年、第5章「第一次大戦前ニューヨーク貨幣市場の国際化」を参照した。

² Cleveland and Huertas, *Citibank*, pp.80-81.

³ 「熱望した銀行家がヨーロッパを旅していた一方で、ひとつの新銀行がコネチカット州のGeneral Assemblyから免許を与えられていた。スペインとの戦争でのアメリカの勝利とアメリカによるフィリピンの併合が、アジアとの貿易の発展の可能性に注意を集中させた。その人々の中で関心を刺激されていたのが、Marcellus Hartleyであった。彼は、1888年に

「一ヨーク貨幣市場の国際化」からも設立から 1913 年までの IBC についての情報を得ることができる。Cleveland and Huertas、Citigroup、須藤に付け加えるべき情報としては、1902 年に、アメリカ政府が、設立直後の IBC を義和団事件賠償金のアメリカ受取分の取扱銀行に指定したことがある⁴。また、須藤によると IBC は 1904 年以降ギャランティ・トラストともにフィリピン政府のニューヨーク資金の取扱銀行となった⁵。

IBC も上記のエクイタブル・トラストやギャランティ・トラストのように州免許銀行として設立された。しかし、IBC にはエクイタブルやギャランティとは異なる制約があった。須藤によると「ニューヨーク州法では、IBC は外国銀行（つまりニューヨーク州法にもとづき設立された銀行あるいはトラスト・カンパニー以外のもの）として位置づけられ、預金の受け入れ、手形の割引、債務証券の発行は禁止されていた。」⁶

次に初期の IBC のバランスシートを見る。下記の表では、1904 年 12 月の預金は 1784 万 6000 ドルである。この内、上記のフィリピン政府ニューヨーク資金は 341 万 7000 ドルであり、19.1%の比重である。

レミントン・アームズ・カンパニーを買収した、成功した商人であった。」「Hartley が最初に成功したのは、南北戦争の時であった。その時かれは、エイブラハム・リンカーン大統領の政府から、陸軍准将に任命され、イギリスのマーチャント・バンクのベアリング・ブラザーズを通してヨーロッパで武器を買うために数百万ドルを与えられて、手数料を得ていた。アメリカに帰ってきた時に、Hartley は、コネチカットで武器と弾薬を作るビジネスを始めた。後に、彼は電灯会社を設立した。その会社は、ウエスティングハウスと合併し、彼は副社長となった。1866 年ごろに、Hartley はモーゼス・テイラーと協力して、最初に成功した大西洋ケーブルへの金融を行った。また同じ頃、彼はエクイタブル・ライフ・アシュアランス・ソサエティの投資責任者であった。」「1901 年 7 月にコネチカットで免許を与えられた新銀行は、インターナショナル・カンパニーと呼ばれ、Marcellus Hartley が社長となった。1901 年のクリスマスの 4 日前に、その会社は、インターナショナル・バンキング・コーポレーションと名前を変えた。その会社の取締役会は、著名な企業弁護士の Thomas Hubbard を含んでおり、彼はまた会長であった。取締役会には、実業家も含まれ、その中には投資銀行家の Jules Bache と Willliam Salomon や、エクイタブル保険とメトロポリタン保険の代表者もいた。1902 年 1 月の Hartley の死後、IBC の社長は Hubbard へと移った。彼はまた会長のままであった。Hubbard はかつてサザン・パシフィック鉄道の財務担当者であった。」Citigroup, *Citibank: A Century in Asia*, p. 27.

⁴ *The Times*, Jan. 2, 1902.

⁵ 須藤『アメリカ巨大企業体制の成立と銀行』第 7 章「第一次大戦前アメリカの対外通貨政策」247-248 ページ。また、同じ箇所にも、1904 年に IBC がギャランティから香港、上海、マニラ各支店を買収したことも記されている。

⁶ ただし、この点と、上記のフィリピン政府ニューヨーク資金の受け入れとの制度的整合性については不明であり、今後の課題である。

IBC バランスシート、1902—1904 年

(単位: 1000US\$)

	1902,Dec	1903,Jun	1903,Dec	1904,Jun	1904,Dec
loan, securities	4410	8470	10146	11886	13385
remittances	9313	8606	7316	9093	12437
organisation a/c	112	97			
furniture and fixture	49	68	83	83	89
cash and due from banks	2535	3420	3242	6101	4572
total	16419	20661	20787	27163	30483
capital	3391	3947	3947	3947	3250
surplus	3391	3947	3947	3947	3250
profit and loss	85	98	105	3	38
acceptances	5326	5717	4234	4410	6099
deposit and due to banks	4226	6952	8554	14856	17846
total	16419	20661	20787	27163	30483

出所) *London and China Express*. 西村閑也教授所蔵。

1904 年のロンドン支店の活動について、間宮『復命書』によって見る。1904 年上半期の Bills receivable 取引総額 840 万ポンド、6 月末残高 63 万ポンド、同期の買入手形 (Bills outward) 取引総額 37 万ポンド、内地割引手形・取引総額 15 万ポンド、手形引受・残高 71 万 9600 ポンド、預金 10 万ポンドとなっている。この数字から仮設バランスシートを作成すると以下のようなになる。下の表では、上記の買入手形と内地割引手形の合計 52 万ポンドを、平均 3 ヶ月満期として算出。負債・資本の部の Capital and Surplus は、資産 1609—(100+630+719) で算出した。下の表から 1904 年のロンドン支店は資金不足店だったと思われる。

ロンドン支店仮設バランスシート、1904 年 6 月 30 日

(単位: 1000 ポンド)

Assets		Liabilities	
Bills receivable	630	Deposits	100
Bills purchased	260	Bills receivable	630
Acceptances	719	Acceptances	719
		Capital and Surplus	160
Total	1609	Total	1609

次に 1904 年 6 月の IBC の全行バランスシートを示し、上のロンドン支店と比較する。預金では、ロンドン支店は全体の 4.3%に過ぎない。しかし Acceptance ではロンドン支店は 81%を占める。また、資産側の二つの手形関連の項目の合計を、全行の Bills discounted と比較するとロンドン支店が 86%となる。これらは国際金融におけるロンドン市場の地位の反映であろう。資産に現金と準備が加われば、ロンドン支店の資金不足はより大きくなり、Capital and Surplus がそれに合わせて増加するだろう。バランスシート全体でのロンドン支店の比率は 29.6%である。

1904, June 30

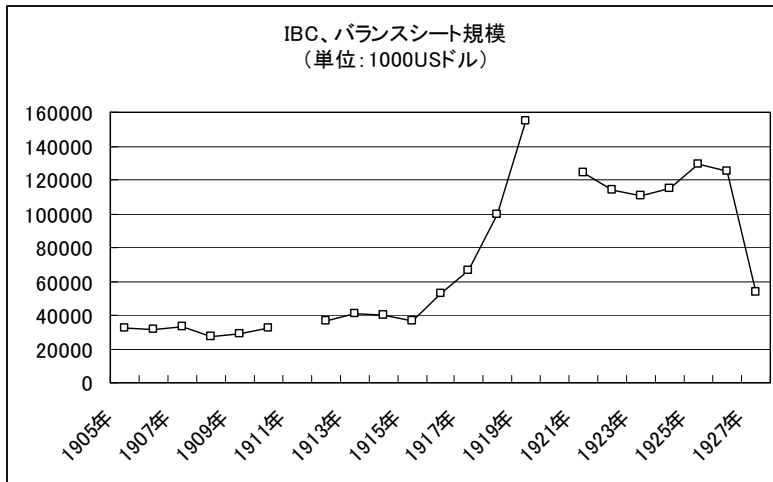
(単位: 1000 ポンド)

Assets		Liabilities	
Bonds and shares	842	Capital	789
Time loans	147	Surplus	789
Bills discounted	1028	Profit and loss	0.6
Demand loans and advances	864	Deposit, time	671
Bullion and remittances	789	Deposit, demand	1641
Due from banks & correspondents	139	Acceptances and bills	882
Cash on hand	1081	Due to banks	658
Commercial credit per contra	523		
Furniture and fixture	16		
Total	5432	Total	5432

出所) *London and China Express*. 西村閑也教授所蔵。

次に、設立から 1927 年までの IBC のバランスシート規模の推移を見る。IBC は 1915 年にナショナル・シティ・バンクの子会社となった。ただし、これは IBC の本支店組織には影響していない。1926 年 12 月に IBC はサンフランシスコ、セブ、マニラ、バルセロナ、マドリッドを除く支店をナショナル・シティ・バンクに移管した。そのため 1927 年のバランスシート規模の縮小が生じた⁷。1926 年に IBC はナショナル・シティ・バンクと一体化したと言って良いだろう。

⁷ *Banking Almanac*, 1927, p. 1476.



次に、IBCの損益について見る。現時点で、IBCの損益が分かるのは1915年下半期と1916年下半期のみである。

半期損益:1915年12月31日

(単位:USドル)

ニューヨーク	260283
横浜+神戸	170000
上海+漢口	108400
香港+広東+シンガポール	78100
マニラ+セブ	121500
ボンベイ+カルカッタ	5400
ロンドン	5000
サンフランシスコ	0
パナマ	-2500
北京	-5700
引当金など	-180803
純利益	559680

半期損益:1916年12月31日

(単位:USドル)

ニューヨーク	210000
横浜	150000
上海	129000
香港	144000
マニラ	98000
ボンベイ	12000
カルカッタ	15000
ロンドン	24000
サンフランシスコ	7000
パナマ	23000
北京	-15000
メデリン	-7000
引当金など	-300000
純利益	490000

1915年12月と1916年12月で、支店の分類が若干異なっている。1916年の横浜には神戸が、上海には漢口が、香港には広東とシンガポールがそれぞれ含まれると推測される。支店別の利益を見ると、1915年、1916年ともニューヨーク本店が最大の利益を上げ、横浜(1915年は横浜+神戸)がニューヨークに次いでいる。ニューヨーク、横浜に続くのは、1915

年はマニラ+セブであり、1916年は香港であった。1916年は、1915年に比べて多くの支店の利益が増加している。ロンドン支店は、1915年、1916年ともに利益額が他支店に比べて小さい。この要因が第一次大戦であるか、IBCの基本的な業務構造であるかは不明である⁸。

次にIBCを他の国際銀行と比較する。1905年から1913年については西村「英系国際銀行とアジア(2)」(6ページ)ですでに主要国際銀行のバランスシート規模の比較がされている。その表によると、1911-1913年の平均のバランスシート規模は、香港上海銀行が39517(単位:1000ポンド、以下同じ)、チャータード銀行26538、横浜正金銀行36746などに対し、IBCは7646で、同表の主要国際銀行で最小である。非英系の国際銀行の設立は、インドシナ銀行1875年、横浜正金銀行1880年、独亜銀行1889年、露清銀行1896年、IBC1902年と、IBCが最後発である⁹。他行に比べてのIBCの規模の小ささはこのような事情を反映しているのだろう。

次に1923年から1926年までのIBCと主要国際銀行のバランスシート規模の比較を行う。上記の西村作成の表および下記の表によると、1911-1913年平均で、IBCのバランスシート規模は香港上海銀行の19%であり、1926年は33%である。

国際銀行バランスシート規模

(単位:1000ポンド)

	1922年	1923年	1924年	1925年	1926年
香港上海銀行	72870	76890	79155	83213	77242
チャータード銀行	60153	58765	61894	70866	66645
横浜正金銀行	108726	129443	144428	137871	115842
IBC	23473	22843	23661	26550	25713

出所) *Economist Banking Number, Banking Almanac.*

次に、各国の中国貿易に占める比率と中国貿易額に占める主要国際銀行資産額の比率を見たのが下記の表である。下の二つの表を見ると、1920年代には、英系2行と横浜正金は自国の貿易シェア以上の資産シェアを持っていたことが分かる。これに比して、IBCは自国の貿易シェア以下の資産シェアしか持っていない。より正確には、アジア各国全体の貿易額と主要国際銀行の資産を比較すべきである。しかし、いずれにしても1920年代のIBCは、絶対的な規模の拡大は達成したものの、香港上海銀行、チャータード銀行、横浜正金銀行といった主要な国際銀行との比較で第一次大戦以前よりも高い地位に至った訳ではな

⁸ 1915年の損益は、Estimated Profit & Loss, 31st December 1915, Frank Vanderlip Papers, E27, International Banking Corporation, Columbia University. 1916年の損益は、Memo. for Mr. Vanderlip, from International Banking Corporation, P. & L. Account, for Six Months ended 31st December 1916, Frank Vanderlip Papers, A, Asutin. Oscar Phelps, National City Bank Memos, 1917, Columbia University.

⁹ 西村「英系国際銀行とアジア(2)」5ページ。

いということが見て取れる。IBC の資産シェアがアメリカの貿易シェアより小さい要因として、1920 年代に新しい米系国際銀行がいくつか設立されたことが挙げられるかもしれない。しかし、それらの新国際銀行の規模は IBC よりも小さかった¹⁰。したがって、IBC のシェアが伸びなかったことの要因は、やはり英系国際銀行や日系国際銀行との競争関係に求めるべきと考えられる。

中国貿易相手

	英+香港	日本	アメリカ
1913 年	40.6%	18.7%	16.4%
1922 年	36.4%	24.0%	16.4%
1923 年	34.5%	24.1%	16.5%
1924 年	32.8%	24.1%	16.1%
1925 年	24.8%	27.9%	16.4%
1926 年	19.4%	27.3%	16.8%

出所) Hsiao Liang-lin, *China's Foreign*

Trade Statistics, 1974.

注) 輸出額+輸入額により算出。

国際銀行資産規模と中国貿易額の比率

	英系2行	横浜正金	IBC
1913 年	27.7%	15.4%	3.2%
1922 年	49.0%	40.0%	8.6%
1923 年	47.8%	45.6%	8.1%
1924 年	46.7%	47.9%	7.8%
1925 年	53.1%	47.5%	9.1%

注) 英系 2 行は、香港上海銀行とチャータード銀行。

III. IBC 北京支店の活動、1922—1930 年

現在、異時点間の活動を比較できる情報を得ることができる IBC の支店は、北京支店とボンベイ支店に限られる。そこで、本節では北京支店の活動の検討を行う。北京支店に関して利用できる基本史料は、1930 年と 1932 年の *Inspection Report* と 1924 年 1 月の「半

¹⁰ 例えば、1923 年 Asia Banking Corp. の BS 規模は 23,524 (単位: 1000 米ドル)、American Oriental Bank Group は 10,420 (同上)。1923 年の IBC は 111,017 (同上)。

期活動報告」と1924年6月の「北京支店：支店統計」である¹¹。1930年10月の北京支店のバランスシートと損益計算書は以下の通り¹²。

北京支店バランス・シート、1930年10月8日

(単位: Peiyang Dollar)

Demand Loan	111000	Profit and Loss	-93798
Time Loan	8000	Current Accounts	1996981
Bills Discounted-Local	750	Managers Checks	1221
Bills Discounted-Remitted	429	Foreign Currency Deposits	936427
Advances in Current Account	37686	Sundry Accounts	41565
Advances in Foreign Currency	1368611	Cash Letters of Credit	300
Temporary Overdrafts-C/A	16623	Drafts Advised & Outstanding	15660
Past Due Obligations	1	Marg. & Prep. A/C	26409
Fgn.Cy. Bills Purchased-Local	11	Certificates of Deposit-Demand	225652
Fgn.Cy. Bills Purchased-Remitted	304890	Certificates of Deposit-Time	3976866
Their Accounts O.D.	6300809	Savings Deposits	2112680
Our Account-Foreign Currency	1501868	Time Deposits-Foreign Currency	36395
Our Account-Local Currency	11843	Their Accounts	2388100
Cash	1513035	Bills Rediscounted-Fgn. Cy.	67366
Reserve Accounts-Local Banks	600406	Discount Collect-Not Earned	12
Foreign Monies	22613	Reserved for Interest	73098
Accounts Receivable	3410	Reserved for Taxes	-29
Prepaid Expenses	1367	Reserved for Other Expenses	-333
Interest Earned-Not Collect	2219		
Total	11804577	Total	11804577

¹¹ National City Bank of New York, Inspection Report, Peiping Sub-Branch, As of October 8 th 1930, Do, July 29, 1932, 上海社会科学院、企業史資料中心、花旗銀行 113。

C. R. Bennett (Peking Manager) to The General Manager, The International Banking Corporation, Half Yearly Report for December 31, 1923. Peking Branch-Branch Statistics, Volume of Business, July-December 1923, Do, January-June 1924, 上海社会科学院、企業史資料中心、花旗銀行 136。

¹² 北京は1928年から北平 (Peiping) と改名されたが、本稿では全て北京として扱う。

北京支店損益計算書

1930年6月25日－1930年10月8日

(単位: Peiyang Dollar)

収益		支出	
手形割引	110	利子	59408
利子	25683	給与	42460
手数料	12516	その他	28139
外国為替	2343		
その他	241		
合計	36208	合計	130007

Peiyang Dollar は計算単位である。1925年で、1Peiyang Dollar (以下 Py \$) は、0.701 海関両。1 海関両は約 0.83 米ドルとすると、1Py \$は、約 0.58 米ドルとなる¹³。1Py \$= 0.58US\$で計算すると、1930年の北京支店のバランスシート規模は 684 万米ドル、預金 (Current Account + Foreign Currency Deposit + Savings Deposit + Time Deposit, Foreign Currency + Certificated Deposit, Demand + Certificated Deposit, Time) は 928 万 Py \$=538 万米ドルとなる。ナショナル・シティ・バンクの海外業務の分布は 1929 年についてしか分からないのでそれを以下に挙げる。

ナショナル・シティ・バンクの海外業務

(単位: 100 万 USドル)

	貸付	預金		貸付	預金
アルゼンチン	26.0	31.8	ベネズエラ	3.3	7.6
ブラジル	26.2	25.9	ベルギー	8.9	8.7
チリ	19.0	11.9	イタリア	7.7	7.9
コロンビア	1.3	0.3	イギリス	35.0	51.9
キューバ	45.8	54.1	中国	36.8	53.1
ドミニカ	3.3	4.5	インド	14.1	9.6
パナマ	3.8	12.0	日本	28.9	8.0
ペルー	7.2	2.7	ジャワ	1.3	1.5
プエルトリコ	10.5	5.2	シンガポール	6.1	3.6
ウルグアイ	4.9	4.4	合計	290.1	304.8

出所) Cleveland and Huertas, *Citibank*, p.125.

¹³ F. Lee, *Currency, Banking, and Finance in China*, 1926, p. 36, および Hsiao Liang-lin, *China's Foreign Trade Statistics*, 1974, p. 192, を参照。

1929年の中国の預金は3680万ドル。それに対する1930年の北京支店の比率は14.6%となる。北京支店の位置付けは、**Inspection Report**で述べられている。「収益と見通し：北京は、上海のサブ・ブランチとして業務を行う。その業務の多くは預金と為替よりなり、親支店に無償で引き渡されている。したがって、各年に報告されている損失は、北京支店の実際の姿を反映してはいない。」「北京は商業的な重要性をほとんど持っていない。北京は、論じるべき産業を持っていないし、預金を投資する機会をほとんど持っていない。私たちに関心がある限りでは、貸付業務は試みられてはいないし、経営活動はほとんど上海で利用するための預金の獲得に限られている。したがって、この支店の有用性は、安い資金を親支店に供給する能力によって決まる。」

北京支店から上海支店への資金供給についても、**Inspection Report**の中でまとめられている。それは以下の通り。下記の表では、預金－貸付から上海支店への供給資金額を算出している。

北京支店の主要勘定、1927－1929年

(単位:1000 Peiyang Dollar)

	1927年	1928年	1929年
Current Accounts	1308	1424	2190
Savings	2086	2419	2466
Fixed Deposits	4276	8324	4056
Sub Total	7670	7667	8712
Loans, Advances, etc.	42	111	128
Advances in Foreign Currency	85	177	440
Sub Total	127	288	568
Funds supplied Shanghai	7500	7754	8230

1930年のバランスシートでは、上海支店への資金供給額は明示されていない。上記の表と同様の方法で算出すると、貸付 (Demand Loan + Time Loan + Bills discounted + Advances + Temporary Overdrafts + Bills purchased) は184万8000 Py \$、預金は928万5001 Py \$なので、預金－貸付は、7437万0001 Py \$となる。もし、貸付の範囲から割引手形 (Bills discounted) と買入手形 (Bills purchased) を除くと、資金供給額は、7743万 Py \$となる。また、上記の表の1929年の預金額を1929年の中国全体の預金と比較すると、871万 Py \$ = 505万米ドル : 3680万米ドルで、北京支店の比率は13.7%となる。

1930年のバランスシートの中で直接上海支店への資金供給を示していると考えられるのは、資産の欄の Their Account である。Their Account についても Inspections Report に

付属データがある。

Their accounts、debit

(単位:Peiyang Dollar)

Local and domestic branches

National City Bank of NY, Shanghai	6300000
National City Bank of NY, Moukden	809
Total	6300809

Inspections Report に挙げられた、北京支店の預金以外の活動は以下のようなものである。「与信：北京では、資金を投資するための商業的な機会はほとんどない。例外は、カトリック大学への貸付である。これは本店を通してもたらされた。この支店の帳簿にある小額な貸付業務は、アメリカ証券に対する米ドル貸付である。私たちが見たことから判断すると、過去に、現地貸付を増加させるための試みはなされていない。他方、確かに、ここでの貸付可能領域は限定されているが、貸付業務を全く獲得できないということを信じることはできない。貸付帳簿を調査している時に、私たちが手形を買っている優良な現地企業は現地で借入れていることを見た。… (以下数行判読不能)」「アメリカ証券：米証券の販売は引き続き良好である。今年の上半期以降の販売額は約 65 万米ドルである。中国基金 (The China Foundation) が期間を通して最大の買手である。しかし、経営陣は、他の顧客に十分な金額の証券を販売することにも成功している。今年上半期以降の株式の売買は 6369 株である。北京は通常、米証券販売するのに良い市場を提供している。北京には大きな富があり、状況がより良くなれば、私たちの販売は増加するだろう。」「外国為替：北京は、為替業務で、非常に多くの、そして利益の上がるオーバー・カウンター・ビジネスを行っている。通常、その金額は 400 万から 500 万米ドルである。その全ては上海に行く。このレポートの他の場所で示したように、もし北京支店が自己勘定で業務することを許されれば、私たちはより多くのビジネスを行うことができ、私たちのサービスを大きく発展させることができると考えられる。親支店に与えられたレートで十分な業務を行うことは難しい。したがって、経営陣が為替業務のために小額を分け与えられることを私は推薦する。」

次に、1922-1923 年の北京支店の活動について見る。1923 年の下半期報告には、バランスシートは記載されておらず、下記のような取引量が記載されている。

北京支店：取引額

(単位：1000 Peking Dollar)

Deposits

	1922 上	1922 下	1923 上	1923 下	1924 上
Current Deposits	1375	1201	1220	1139	1919
Savings Deposits	1770	1988	1984	2145	2235
Time Deposits	3892	3917	4044	4719	4592
Bank Notes	2505	3085	2084	2155	2028
Loans from NY	3091	3167	2692	2044	1286
Founds with Shanghai	5989	8863	8838	8870	8547
Tientsin	0	75	163	377	648
Hankow	0	0	4	5	11

Earning Accounts

	1922 上	1922 下	1923 上	1923 下	1924 上
Advance Bills Receivable	4	2	4	10	8
Overdrafts	207	199	268	254	241
Time Loans	91	1	126	220	381

Bills & Credits

	1922 上	1922 下	1923 上	1923 下	1924 上
Bills Received for Collection					
From Branches	28	43	21	10	1
All Others	7	132	24	43	22
Travellers letters of Credits	56	78	31	82	88

また、北京支店の損益は、半期報告より、1922 年下半期マイナス 20 万 2665 北京ドル、1923 年上半期マイナス 19 万 3630 北京ドル、1923 年下半期マイナス 20 万 2549 北京ドルである。

北京ドルという通貨は Frederic Lee の *Currency, Banking and Finance in China* には現われない。半期報告の中に「私たちの最終相場は、上海におけるメキシコ・ドルのレート 71.90 に対して、1%以上の違いがある 72.80 上海両である」とある¹⁴。これを 100 北京ドル=72.8 上海両と考える。すると、100 海関両=111.4 上海両と、1 米ドル=1.2 海関両か

¹⁴ C. R. Bennett (Peking Manager) to The General Manager, The International Banking Corporation, Half Yearly Report for December 31, 1923, p.2 上海社会科学研究所, 企業史資料中心、花旗銀行 136。

ら、1北京ドル=約0.54米ドルとなる。本稿では暫定的にこの数字を使用する。

以上の、北京支店の取引量と損益から、1930年のバランスシートを参考にして、1923年12月のバランスシートを推定してみる。この時、上の表の預金の項目の中にある「Funds with Shanghai, Tientsin, Hankow」が負債項目に入るのかどうかという問題がある。ここでは、1930年のバランスシートと Inspection Report を参考にして、「Funds with Shanghai」は北京支店から上海支店への資金供給額を表していると考ええる。

北京支店仮設バランスシート、1923年12月

(単位: 1000 Peking Dollar)

Cash and Reserve	2196	Profits and Loss	-20
Advance Bills Receivable	5	Current Deposits	1139
Overdrafts	127	Savings Deposits	2145
Time Loan	220	Time Deposits	4719
Bills Received for Collection	27	Loans form NY	2044
Travellers Letters of Credits	41	Bank Notes	2155
Funds with Shanghai	8870		
Tientsin	377		
Hankow	5		
Total	11868	Total	12182

注)Cash+Reserve は 1930 年により総負債の 18%。

手形と Overdrafts は 3 カ月満期、Time loan は 6 カ月満期と想定。

いくつかの仮定を設けてバランスシートを推定したが、仮設バランスシートは資産と負債がほぼバランスするので、仮定の中に大きく誤ったものはないと考えられる。特に、「Funds with Shanghai」は金額が大きく、これを負債側に置くと、資産と負債に大きなアンバランスが生じることから、「Funds with Shanghai」を 1930 年のバランスシートに倣って資産側に置くことは妥当であろう。また、1930 年と 1923 年を比較して、北京支店のバランスシートの構造に大きな変化はないと言える。

1北京ドル=0.54米ドルというレートを使って、1923年と1930年のバランスシート規模を比較すると、バランスシート規模は、1930年の684万米ドルに対して1923年は657万米ドル、預金は1930年の538万米ドルに対して1923年は432万米ドルとなる。バランスシート規模で、北京支店の成長率を測ると、年0.6%となる。

以上の検討より、IBC北京支店は1920年代を通して、預金獲得と上海支店への資金供給という役割を果たしていたという結論が出る。

IV. 貿易港支店の事例：1936年の天津支店と1937年の広東支店

Ⅲで1920年代の北京支店の活動を明らかにした。北京支店は損失を生む支店であったが、それは上海支店に資金を供給するために生じていた。したがって、私たちは可能であれば上海支店の活動を検討したい。しかし、上海社会科学院には上海支店のデータを含む史料は残っていなかった。中国の貿易港にある支店では、1936年10月の天津支店と1937年1月の広東支店のデータだけが利用可能である¹⁵。そこで、本節ではこの2支店のデータを見することで、IBCの中国での利益獲得行動の一部を示すを試みる。

まず、天津支店の損益計算書とバランスシートを示す。

天津支店損益、1936年1月－1936年10月

(単位: Tientsin Dollar)

収益		支出	
利子	29841	利子	12856
手形割引	92	給与	12698
為替	26918	その他	7189
手数料	1622	税	50
その他	553		
合計	50022	合計	32795

1 天津ドルは約0.301米ドル。1936年10月は5398天津ドルの黒字である。同じ史料の中に天津支店の1936年9月、1936年1月－1936年10月、1935年1月－10月の損益も示されている。1936年9月は17227天津ドル、1936年1－10月は198975天津ドル、1935年1－10月は224335天津ドルのいずれも黒字であった。収益源は、1936年10月は利子が為替を上回っているが、1936年9月、1936年1－10月、1935年1－10月はいずれも為替が利子を上回っていた。

天津支店収益

(単位: Tientsin Dollar)

	1936.9	1936.1-10	1935.1-10
利子	20841	213978	170766
為替	26918	235362	365203

¹⁵ Tientsin Manager to Mr. Hart, Vice President, The National City Bank of New York, Monthly Letter No. 64, October, 1936, 上海社会科学院、企業史研究中心、花旗銀行 166。Canton Manager to Mr. Hart, Vice President, The National City Bank of New York, Monthly Letter No. 67, January 29, 1937, 上海社会科学院、企業史研究中心、花旗銀行 156。

天津支店バランスシート、1936年10月24日

(単位: 1000 Tientsin Dollar)

Assets		Liabilities	
Cash	425	Current accounts	2791
Call loans	1245	Saving accounts	827
Loans against stock and bonds	354	Time Deposits	1550
Loans against mortgages	792	HO&Branches	255
Commercial loans and advances	1176	Foreign Cy. Deposits	6853
All other local loans	52	Profit and Loss	5
Trade paper discounts	28		
Advance bills local	409		
Export advances	986		
Foreign Cy. Bills purchased	2995		
Past due obligations	146		
Bank premises	88		
Other	223		
Due from HO&Branches	3608		
Total	12527	Total	12281

天津支店のバランスシートを見ると、外貨手形買入 (Foreign Currency Bills purchased)、商業貸付 (Commercial loan and advances)、輸出貸付 (Export advances、これは詳しくは、Export o/d, Advances against export bills, Export bills in local currency) などの比率が高い。ここから、貿易港にあり利益を上げている支店のバランスシート構成の特徴を見て取ることができる。また、Advance bills local は、輸入という項目に入っている。ただし、天津支店でも、北京支店の Their account に対応すると思われる Due from Head Office and Branches の金額も大きい。次に広東支店の損益計算書を示す。

広東支店損益、1937年1月

(単位: Hong Kong Dollar)

収益		支出	
利子	4231	利子	1716
手形割引	0	給与	6986
為替	2301	その他	3257
手数料	729	税	130
その他	175		
合計	7437	合計	12090

1 香港ドルは約 0.3056 米ドルである。広東支店は 1937 年 1 月は 4633 香港ドルの赤字であった。しかし、1936 年 12 月と 1936 年 1 月は黒字となっている。

広東支店損益

(単位; Hong Kong Dollar)

	1936.12	1936.1
収益		
利子	3810	13191
為替	2813	14075
支出		
利子	1588	1623
給与	6016	7383
その他	427	3380

1937 年 1 月の広東支店の赤字の要因は、1936 年 12 月と比較すると、その他支出の増大であり、1936 年 1 月と比較すると収益が利子・為替の両方で大きく減少したことである。1936 年 1 月もその他支出が増大していることを見ると、1 月のその他支出は季節的な要因の可能性はある。そうだとすると、1937 年 1 月の収益低下が問題となる。次に広東支店のバランスシートを示す。

広東支店バランスシート、1937年1月25日

(単位: 1000 Hong Kong Dollar)

Assets		Liabilities	
Cash	895	Current accounts	1446
Loans against stocks and bonds	6	Savings accounts	5026
Loans against mortgages	111	Time deposits	303
Commercial loans and advances	250	Foreign Cy. Deposits	253
Foreign Cy. Bills purchased	2	Profit and loss	-4
Export advances	57		
Foreign Cy. Bills remitted	311		
Past due obligations	33		
Bank premises	67		
Other assets	69		
Due by HO&Branches	5896		
Total	7697	Total	7024

広東支店のバランスシートでは、天津支店とは異なり、資産側の貿易金融に関わる項目の比率が小さい。資産のほとんどが北京支店の Their account と同様の Due by Head Office and Branches で占められている。したがって、広東支店は貿易港にある支店であるが、そのバランスシート構造は天津支店よりも北京支店に近いと言える。ただし、広東支店は北京支店のような恒常的な赤字支店ではない。この違いをもたらした要因は、広東支店の為替取引であると考えられる。広東支店の損益計算書で為替が主要な収入源となっていることと、北京支店の Inspection Report で、北京支店でも為替取引の収益が上海支店ではなく北京支店に付けられれば北京支店の損益が改善されると検査役が述べていることから、そのように考えられる。

V. 結論

IBC の活動に関するオーバービューからは、IBC は第一次大戦期に大きく規模を拡大したものの、香港上海銀行、チャータード銀行、横浜正金銀行といった主要な国際銀行の地位に接近することは難しかったことが示された。戦間期の中国諸支店に関する実証分析からは、第一に、1920年代に北京支店が一貫して上海支店に資金を供給する役割を果たしていたことが示された。そこから、IBC の中国支店網では、上海支店が主要な利益獲得支店となっていた可能性が示された。そこで、第二に、貿易港に所在し、上海支店と類似の構造を持つと推測される天津支店の活動の分析から、貿易港にある支店は、資産側に多額の貿易金融項目を持っており、そこから利益を得ていることが示された。広東支店は1937年1月

には赤字を出し、資産側でも他支店勘定の比率が大きいことから、一見、貿易港にあるにもかかわらず北京支店と同様の構造を持つように見える。しかし、1936年1月には利子・為替収益によって利益を上げていることから、通常は天津支店と同様に貿易金融で利益を上げていたのではないかと考える。

以上の分析からは、全体としてIBCの活動は、米系国際銀行としての特徴は見て取ることができなかった。むしろ、Ⅱでのロンドン支店の役割、Ⅲでの北京支店の役割、Ⅳでの天津支店の役割など、他の先行する国際銀行と類似な構造を持つということが明らかになったと言える¹⁶。活動の構造が類似していたからこそ、後発の不利益によって、主要な国際銀行のシェアを奪うことができなかったのではないだろうか。

¹⁶ 西村閑也「香港上海銀行の行内資金循環、1913年」を参照。